

血液型性格類型論と性格検査との関係について

藤 田 主 一

I. はじめに

A B O式血液型と気質（性格）との関連性を示唆したのは、1916年（大正5年）7月の『医事新聞』954号に掲載された「血液ノ類属的構造ニ就テ」という論文を発表した原来復と小林栄が最初である。この論文は、それから以後の日本の社会に流布してきた、A B O式血液型と人間の性格とが関係するという考え方のルーツである。彼らはこの論文の中で、A型者は温厚で成績も優秀だが、B型者は粗暴で成績も不良の傾向があると述べ、偶然性を主張しながらもその必然性を同時に強調している。その後、時代的な影響が反映されて軍隊内における兵卒の血液型が取り上げられるなど、さまざまな属性を血液型によって分類しようとする試みが行われた。

人間の行動を血液型から理解したり、血液型で人間の行動を追求する動きは、大正から昭和初期にかけて紆余曲折を辿りながら展開することになるが、心理学的なセンスを用いて人間の行動を血液型と関連づけたのは、東京女子高等師範学校（現在のお茶の水女子大学）教授だった古川竹二である。

当時の古川学説は、職業選択や結婚の相性決定に、強力な軍隊の構成に、また優秀な国民の育成にさまざまなところで応用されるようになって行った。しかし、心理学や医学の学会を巻き込んだ古川の「血液型気質相関説」は、1927年（昭和2年）に発表された論文『血液型による気質の研究』をスタートに、1932年（昭和7年）に出版された『血液型と気質』という著書をピークに、以後、日本社会の中で衰退の一途を迎えていくのである。

古川が生涯をかけた情熱的な研究の方向は、古川の死後およそ30年を経た昭和40年代に、能見正比古によって新たな復活をした。能見は1971年（昭和46年）の『血液型でわかる相性』をはじめとする数多くの著書を次々と出版し、A B O式血液型と性格とが豊かな関連性を持っている事実を標榜して行った。今日、日本の社会に世俗的な浸透を示している「血液型人間学」は、古川が学術的に展開した理論を大衆にフィットするような形に置き換えられたものといえる。科学的な論点とは程遠い「血液型人間学」が、なぜマス・メディアを通して日本の社会に定着してしま

ったのだろうか。血液型と性格との関連性を痛烈に批判している大村政男は1991年（平成3年）の論文の中で、以下の3点をその原点と見ている。

(1)古川学説が持っている硬さを破って、非常にソフトな、訳のわからないものにしてしまった。

(2)生物的女性は血の価値を認識し、その女性が持っているエロスの心情の中にウイルスのように侵入してきた。

(3)テレビ・新聞・週刊誌などを賑わしている膨大な数の有名人の血液型を収集し、その面白おかしい解説に加えて、それらの人々と無名の女の子とを結びつけた。

ところで、科学としての心理学と大衆に浸透しやすい心理学とは、基本的に研究上の手続きが異なることは否定できない。ここ10年来、「血液型人間学」に対する批判は、心理学者を中心に展開されてきたが、その心理学的な研究分野は、①古川学説の歴史的研究、②心理学の標準検査による各血液型者の研究、③血液型ステレオタイプを背負っている人たちについての研究、④対人認知様式による血液型性格判断の研究、⑤日本における血液型判断ブームの研究などが考えられている。

例えば、第2の分野において、長谷川芳典は1985年（昭和60年）の論文で、矢田部・ギルフォード性格検査（Y-G性格検査）の性格特性と血液型との対応を試みている。しかし、Y-G性格検査でみる限り、血液型は何の行動特性をも予測できないという否定的な結果しか得られなかった。大村も1993年（平成5年）の論文で、同様に、Y-G性格検査と血液型との関係を調査しているが、追試的に可能な範囲で意味ある差異とはいえないとの結論だった。これらの結果は何を物語っているのだろうか。

また、第5の分野において、1994年（平成6年）9月10日に城西大学で開催された日本応用心理学会第61回大会で、『血液型性格判断、ホントか、ウソか』というパネル・ディスカッションが企画された。コーディネーターを筆者が務め、話題提供者に大村の他、井口拓自、佐藤達哉、富家孝が名を連ねた。話題提供者のそれぞれが心理学的、医学的見地から今日のブームにメスを入れ、会場に集まった多数の聴衆とともに建設的で白熱した議論が展開された。大会プログラムには、以下の企画の趣旨が掲載されている。「ABO式の血液型と人間の気質・性格が関連しているという考え方は、1916年（大正5年）に始まっている。『医事新聞』に発表された原・小林の論文がそれである。この考えは、古川竹二のいわゆる「血液型気質相関説」によって、エポックメイキングな進歩を見せるのであるが、古川の学説はそれが包含する思考錯誤的な理論のために1938年には崩れてしまう。それから1984年までの約50年間、この魅力的な領域は空白になっていたのである。一種の端境期のようなこの空白の時代に出現したのが能見正比古の「血液型人間学」という偽科学である。これは、古川の学説のたぐみなコピーで大衆の人気を博している。能見は「血液型人間学」によって初めて人間性を科学的に調査しうる分類基準を入手できたとし、心理学は科学ではないと豪語している。われわれはすでに学会発表や学術論文によって偽科学に

対して反撃を加えている。今回のパネル・ディスカッションもその一端であるが、われわれの批判に対して感情的でない反論がほしいところである。」というものである。学会という学術的な世界で、このような議論の場が持たれるのはごく最近の特徴といえる。

本研究では、「血液型と性格との関連性」を批判的な見地から心理学的に解明するために、上記の5つの分野の中の特に第2の分野について、標準化されている性格検査(Y-G性格検査)を材料にして、女子大学生を対象に再度追試してみようと思う。なお、「血液型性格類型論」という名称は、ABO式血液型による性格分類を従来から用いられている“類型論”の1つとして取り上げるという立場から使用しているものであって、決して日本の社会でポピュラーな名称ではない。

II. 目的と方法

「血液型人間学」は、人間の現在または未来の行動特性がABO式の血液型によって異なると主張している。もしこれが正しいとするならば、この違いは心理学的に標準化された性格検査を構成する測定尺度の違いとして反映されるはずである。そこで、本研究では長谷川(1985年)や大村(1993年)がかつて調査材料にしたY-G性格検査を用いて、この検査の12特性と血液型との関連性を追究してみようと思う。

被験者は、東京都および埼玉県内の女子大学生247名である。被験者の血液型は、A型者92名、B型者63名、O型者63名、AB型者29名であった。なお、被験者247名の血液型別による人数分布は、日本人の出現頻度(A型者37.3%、B型者22.1%、O型者31.5%、AB型者9.1%—古畑種基による)から算出された理論頻数と比較して有意な差ではなかった($\chi^2=6.27$, $df=3$, $n.s.$)。

調査材料として用いられたY-G性格検査は、通常の「心理学」の講義時間中に集団で行われたが、その一般的な手続きは、この検査の標準法に準拠している。

III. 結果と考察

1. ABO式血液型と12尺度との関係について

ここで、Y-G性格検査の測定尺度について説明する。Y-G性格検査は12尺度(性格特性)によって構成されている。即ち、

- (1) D尺度：抑うつ性 (depression)
陰気、悲観的気分、罪悪感の強い性質。
- (2) C尺度：回帰性傾向 (cyclic tendency)
著しい気分の変化、情緒的変動性・不安定性、驚きやすい性質。
- (3) I尺度：劣等感 (inferiority feelings)

自信の欠如，自己に対する過小評価，不適応感の強さ。

(4) N尺度：神経質 (nervousness)

心配性，神経質，ノイローゼ気味，傷つきやすさ。

(5) O尺度：客観性の欠如，主観性 (lack of objectivity)

空想的，過敏性，主観的。

(6) Co尺度：協調性の欠如，非協調性 (lack of cooperation)

不満が多い，人を信用しない性質。

(7) Ag尺度：愛想の悪さ，攻撃性 (lack of agreeableness)

攻撃的，社会的活動性，但しこの性質が強すぎると社会的不適応になりやすい。

(8) G尺度：一般的活動性 (general activity)

心身両面での活発な性質，身体を動かすのが好き。

(9) R尺度：のんきさ，衝動性 (rhythymia)

気軽さ，のんきさ，活発，衝動的な性質。

(10) T尺度：思考的外向 (thinking extraversion)

非熟慮的でおおざっぱな性質，その反対は瞑想的，反省的，熟慮的。

(11) A尺度：支配性 (ascendance)

社会的指導性，リーダーシップのある性質，その反対は服従性。

(12) S尺度：社会的外向 (social extraversion)

対人的に外向的，社交的，社会的接触を好む性質，その反対は対人的接触を避ける。

また，上記の12尺度は次の6因子にまとめられる。即ち，

(1) D, C, I, N……………情緒安定—情緒不安定 (情緒安定性)

(2) O, Co, Ag……………社会的適応—社会的不適応 (社会的適応性)

(3) Ag, G……………非活動性—活動性 (活動性)

(4) G, R……………非衝動性—衝動性 (衝動性)

(5) R, T……………内省的—内省的でない (内省性)

(6) A, S……………非主導的—主導権を握る (主導性)

Y-G性格検査の12尺度に含まれる得点の平均値と標準偏差 (SD) を，血液型別にまとめたものは表1に示したとおりである。また，表1には12尺度に対する血液型別の得点に有意差が存在するかを見るために，分散分析 (F_0 値) の結果を載せている。女性の場合，各尺度得点数値は以下の意味がある。

D尺度 (抑うつ性) は，得点が16点以上になると“抑うつ性大”の傾向が強まり，9点以下ではその傾向が低くなると判断される。

C尺度 (回帰性) は，得点が14点以上になると“気分の変化大”の傾向が強まり，7点以下で

表1 血液型別のY-G性格検査12尺度の平均値 (SD)

尺度	A型者	B型者	O型者	AB型者	全体	F ₀	有意差
D 抑うつ性	8.46(5.26)	8.57(5.69)	8.14(5.69)	7.90(5.01)	8.34(5.43)	0.14	n.s.
C 回帰性	8.71(4.87)	9.75(4.80)	8.37(4.33)	9.14(4.94)	8.94(4.73)	1.01	n.s.
I 劣等感	8.87(4.98)	8.48(4.53)	8.16(4.98)	6.62(4.22)	8.32(4.80)	1.67	n.s.
N 神経質	9.01(4.86)	8.95(4.96)	8.00(3.98)	7.83(4.92)	8.60(4.69)	0.96	n.s.
O 主観性	7.95(3.91)	7.89(4.19)	7.62(4.27)	7.62(4.35)	7.81(4.10)	0.11	n.s.
Co 非協調性	6.03(3.77)	6.79(4.16)	6.08(3.80)	5.48(2.68)	6.17(3.77)	0.95	n.s.
Ag 攻撃性	10.03(4.29)	10.68(4.01)	9.90(3.98)	9.83(3.94)	10.14(4.09)	0.51	n.s.
G 活動性	12.68(4.25)	12.16(4.36)	13.32(3.72)	12.79(3.89)	12.72(4.11)	0.84	n.s.
R 衝動性	12.12(4.37)	12.60(4.05)	12.00(4.30)	12.07(3.91)	12.21(4.20)	0.26	n.s.
T 思考的外向	10.43(4.22)	11.21(4.67)	9.98(4.46)	10.66(4.61)	10.54(4.44)	0.82	n.s.
A 支配性	11.13(4.62)	11.33(4.14)	11.59(4.65)	12.07(4.51)	11.41(4.47)	0.37	n.s.
S 社会的外向	15.26(4.17)	14.57(3.73)	15.44(4.31)	15.66(3.39)	15.18(4.01)	0.72	n.s.

はその傾向が低くなると判断される。

I尺度(劣等感)は、得点が13点以上になると“劣等感大”の傾向が強まり、5点以下ではその傾向が低くなると判断される。

N尺度(神経質)は、得点が13点以上になると“神経質”の傾向が強まり、7点以下ではその傾向が低くなると判断される。

O尺度(主観性)は、得点が11点以上になると“主観的”な傾向が強まり、6点以下ではその傾向が低くなると判断される。

Co尺度(非協調性)は、得点が9点以上になると“非協調的”な傾向が強まり、4点以下ではその傾向が低くなると判断される。

Ag尺度(攻撃性)は、得点が13点以上になると“攻撃的”な傾向が強まり、8点以下ではその傾向が低くなると判断される。

G尺度(活動性)は、得点が14点以上になると“活動的”な傾向が強まり、7点以下ではその傾向が低くなると判断される。

R尺度(衝動性)は、得点が12点以上になると“のんき”な傾向が強まり、6点以下ではその傾向が低くなると判断される。

T尺度(思考的外向)は、得点が11点以上になると“思考的外向”の傾向が強まり、5点以下ではその傾向が低くなると判断される。

A尺度(支配性)は、得点が12点以上になると“支配性大”の傾向が強まり、4点以下ではその傾向が低くなると判断される。

S尺度(社会的外向)は、得点が14点以上になると“社会的外向”の傾向が強まり、7点以下ではその傾向が低くなると判断される。

表1から理解できることは、たとえばD尺度を例にとると、A型者、B型者、O型者、AB型者とも“抑うつ性”は低い傾向にあり、中でもAB型者が7.90点で最も低い。分散分析の結果では血液型による差は有意なものではないということである。つまり、“抑うつ性”の低さは女子大学生全体の性格特性と解釈することができるため、各血液型によって性格構造の違いが反映されず、血液型による行動特性や性格特性が妥当性を持たないことを意味している。また同様に、I尺度については中でもA型者(8.87点)が最も“劣等感”が強く、AB型者(6.62点)が最も低い結果だが、これも各血液型別の分散分析では有意差にはなっていない。“劣等感”の6点台や8点台は、Y-G性格検査で得られた女性の平均においては高い傾向にもない。さらに、今回の12尺度得点で最も高い得点はS尺度(全体で15.18点)である。これは“社会的外向”の高さを示すものだが、血液型別で検定しても何らの差異も存在しない。おそらく、今回の調査から得られた解釈は、ABO式血液型を変数としてY-G性格検査の12尺度を弁別した場合、その測定値は血液型による反映ではなく、現代の女子大学生の性格特性であると考えべきである。

2. ABO式血液型と系統値・判定型との関係について

Y-G性格検査では、12尺度の位置(プロフィール)から系統値を算出し、型としての性格構造を判定することができる。即ち、5つの類型(A, B, C, D, E)をそれぞれ典型、準型、混合型に細分して15の型に分類する。表2は5つの典型的名称とその解釈について、また、表3

表2 Y-G性格検査プロフィールの型

典型	英語名 Type	型による名称	因子		
			情緒安定性	社会適応性	向性
A	Average	平均型	平均	平均	平均
B	Black List	右寄り型	不安定	不適応	外向
C	Calm	左寄り型	安定	適応	内向
D	Director	右下がり型	安定	適応または平均	外向
E	Eccentric	左下がり型	不安定	不適応または平均	内向

表3 15の型の記号表示

型 \ 類型	A類型	B類型	C類型	D類型	E類型
典型	A	B	C	D	E
準型	A'	B'	C'	D'	E'
亜型(混合型)	A''	AB	AC	AD	AE

は15の型の記号表示をまとめたものである。ここで、典型の一般的解釈を提示する。

- A典型……………目立たない平均的なタイプで主導性は弱い。知能の低い場合は平凡・無気力の人が多い。
- B典型……………不安定積極型。対人関係の面で問題を起こしやすい。知能の低い場合は特にその傾向が強い。
- C典型……………安定消極型。平穏だが受動的であり、リーダーとして他人を引っ張っていく力は弱い。
- D典型……………安定積極型。対人関係で問題を起こすことも少なく、行動が積極的だから仕事の面でもレクリエーションの面でもリーダーに向いた性格である。
- E典型……………不安定消極型。引っ込み思案で積極性に欠ける「閉じこもり型」だが、自分自身の内面は趣味や教養で充実することが多い。

Y-G性格検査は理論構成上、各系統値が0から12までの整数値をとり、A+B+C=12、また、A+D+E=12（12は尺度の数）となる。まず、血液型別に5つの系統値（A系統値、B系統値、C系統値、D系統値、E系統値）の分布を算出した。表4に示したとおり、分散分析の結果、各血液型による系統値への分布に有意差はすべて存在しない。これは、被験者全体のプロフィールと各血液型のプロフィールとの間に隔たりがないことを示している。

表4 血液型別による系統値への分布（SD）

系統値	A型者	B型者	O型者	AB型者	F ₀	有意差
A	4.50(2.09)	4.49(2.07)	4.59(2.02)	4.62(2.29)	0.05	n.s.
B	4.35(1.91)	4.59(1.80)	4.03(1.84)	4.14(1.94)	1.02	n.s.
C	3.14(2.23)	2.92(2.15)	3.38(2.11)	3.24(1.92)	0.50	n.s.
D	5.20(2.88)	5.24(2.94)	5.46(2.96)	5.62(2.91)	0.22	n.s.
E	2.32(2.28)	2.27(2.00)	1.95(1.65)	1.76(1.62)	0.87	n.s.

次に、女子大学生個々人の系統値分布から、15類型（判定型）への出現比率を求めた。表5は15類型に対する247名の出現率を、血液型別にまとめたものである。血液型A型者で出現頻度の最も高かった判定型はD'型の17.4%、血液型B型者ではD'型の30.2%、血液型O型者ではD型の20.6%、血液型AB型者ではD型の31.0%となり、いずれもD類型に所属している。D'型はD型の準型であり、D型の性格構造から12尺度の一部が逸脱した場合を指している。表5に示された判定型別の頻度（%）に血液型によって一定の方向が見られるかを検定したが、その分布に有意な差はなかった（ $\chi^2=43.38, df=42, n.s.$ ）。さらに、表5の各判定型を5つの性格類型にまとめて血液型との関係を見ると、全体ではD類型（44.9%）、B類型（24.7%）、A類型（17.8%）、C類型（7.7%）、E類型（4.9%）となる一方、どの血液型でもD類型が最も高い（たとえばAB型者は51.7%である）が、血液型による類型への偏りに有意差は認められない（ $\chi^2=7.87, df=$

表5 血液型別による判定型の人数分布

単位：人，()内は%

血液型 判定型	A型者		B型者		O型者		AB型者	
	頻度(%)	類型(%)	頻度(%)	類型(%)	頻度(%)	類型(%)	頻度(%)	類型(%)
A型	1(1.1)		2(3.2)		0(0)		1(3.4)	
A'型	3(3.3)	17(18.5)	2(3.2)	7(11.1)	3(4.8)	14(22.2)	2(6.9)	6(20.7)
A''型	13(14.1)		3(4.8)		11(17.5)		3(10.3)	
B型	3(3.3)		3(4.8)		1(1.6)		1(3.4)	
B'型	13(14.1)	24(26.1)	6(9.5)	20(31.7)	6(9.5)	12(19.0)	2(6.9)	5(17.2)
AB型	8(8.7)		11(17.5)		5(7.9)		2(6.9)	
C型	4(4.3)		2(3.2)		1(1.6)		1(3.4)	
C'型	0(0)	7(7.6)	2(3.2)	4(6.3)	0(0)	5(7.9)	0(0)	3(10.4)
AC型	3(3.3)		0(0)		4(6.3)		2(6.9)	
D型	14(15.2)		6(9.5)		13(20.6)		4(13.8)	
D'型	16(17.4)	39(42.4)	19(30.2)	29(46.0)	12(19.0)	28(44.4)	9(31.0)	15(51.7)
AD型	9(9.8)		4(6.3)		3(4.8)		2(6.9)	
E型	3(3.3)		1(1.6)		0(0)		0(0)	
E'型	2(2.2)	5(5.4)	0(0)	3(4.8)	2(3.2)	4(6.3)	0(0)	0(0)
AE型	0(0)		2(3.2)		2(3.2)		0(0)	

12, *n.s.*)。

表6は、尺度得点をY-G性格検査が構成している6因子(情緒安定性、社会的適応性、活動性、衝動性、内省性、主導性)に組み換えて血液型別に示したものである。表5からも明らかのように、いずれの因子も血液型とは無関係に類似の測定値を与えており、また分散分析の結果でも有意な差は見られなかった。これまでに得られた結果は、Y-G性格検査の尺度得点のどれを取ってもABO式血液型との間に有意な関係が存在しないことを示している。いわゆる「血液型人間学」では血液型によって行動予測が可能であったり、性格特性を把握できると主張しているが、もしそれが事実だとすると、心理学的に標準化された性格検査にも十分に反映されるはずで

表6 Y-G性格検査の6因子への分布(SD)

因子構造(因子名)	A型者	B型者	O型者	AB型者	F ₀	有意差
情緒安定—不安定(情緒安定性)	8.76(4.14)	8.94(4.24)	8.17(3.80)	7.87(3.93)	0.73	<i>n.s.</i>
社会的適応—不適応(社会的適応性)	8.00(3.03)	8.46(2.89)	7.87(2.82)	7.64(2.39)	0.70	<i>n.s.</i>
非活動性—活動性(活動性)	11.36(3.44)	11.42(2.90)	11.61(3.06)	11.31(2.64)	0.10	<i>n.s.</i>
非衝動性—衝動性(衝動性)	12.40(3.61)	12.38(3.28)	12.66(3.45)	12.43(2.92)	0.09	<i>n.s.</i>
内省的一内省的でない(内省性)	11.28(3.55)	11.90(3.36)	10.99(3.33)	11.36(3.39)	0.79	<i>n.s.</i>
非主導的—主導権を握る(主導性)	13.20(4.00)	12.95(3.63)	13.52(4.14)	13.86(3.65)	0.45	<i>n.s.</i>

あるが、今回のY-G性格検査によるデータは「血液型人間学」に有利な証拠にはならなかった。反対に、「血液型と性格」との関連性を根本的に否定するものとなった。

3. ABO式血液型と因子分析による12尺度のパターンとの関係について

血液型A型者92名、B型者63名、O型者63名、AB型者29名によるY-G性格検査の12尺度の得点を変数とし、その相関に基づいて因子分析を行った。固有値1以上の条件により主因子法・バリマックス (Varimax) 回転を行ったところ2因子を抽出した。各因子を構成している尺度には、

表7 A型者におけるバリマックス回転後の因子パターン

尺 度	第 I 因子	第 II 因子	共通性
N 神経質	0.807		0.768
D 抑うつ性	0.801		0.688
Co 非協調性	0.707		0.636
C 回帰性	0.712		0.508
O 主観性	0.705		0.498
I 劣等感	0.576	-0.612	0.706
T 思考的外向	-0.473		0.312
A 支配性		0.747	0.633
R 衝動性		0.739	0.555
G 活動性		0.652	0.477
Ag 攻撃性	0.446	0.644	0.614
S 社会的外向		0.613	0.417
因子寄与	3.864	2.949	

表8 B型者におけるバリマックス回転後の因子パターン

尺 度	第 I 因子	第 II 因子	共通性
D 抑うつ性	0.897		0.860
N 神経質	0.829		0.696
I 劣等感	0.724		0.609
O 主観性	0.711		0.506
C 回帰性	0.708		0.575
Co 非協調性	0.539		0.398
T 思考的外向	-0.580		0.368
Ag 攻撃性	0.402		0.315
S 社会的外向		0.836	0.794
A 支配性		0.631	0.506
R 衝動性		0.595	0.396
G 活動性		0.493	0.385
因子寄与	4.199	2.210	

0.4以上の負荷量があるものを取り上げている。表7はA型者、表8はB型者、表9はO型者、表10はAB型者のバリマックス回転後の因子行列(パターン)をそれぞれ掲げたものである。表11

表9 O型者におけるバリマックス回転後の因子パターン

尺 度	第 I 因子	第 II 因子	共通性
D 抑うつ性	0.873		0.763
O 主観性	0.773		0.672
N 神経質	0.736		0.643
Co 非協調性	0.685		0.517
C 回帰性	0.666		0.497
I 劣等感	0.614	-0.587	0.722
T 思考的外向	-0.534		0.293
R 衝動性		0.753	0.582
S 社会的外向		0.709	0.524
A 支配性		0.687	0.474
Ag 攻撃性		0.679	0.485
G 活動性		0.585	0.433
因子寄与	3.631	2.974	

表10 AB型者におけるバリマックス回転後の因子パターン

尺 度	第 I 因子	第 II 因子	共通性
D 抑うつ性	0.901		0.814
C 回帰性	0.770		0.625
O 主観性	0.744		0.560
N 神経質	0.691		0.494
I 劣等感	0.684		0.604
Co 非協調性	0.495		0.245
S 社会的外向		0.891	0.812
A 支配性		0.801	0.670
Ag 攻撃性		0.644	0.417
R 衝動性		0.558	0.318
T 思考的外向			0.088
G 活動性			0.123
因子寄与	3.375	2.397	

は血液型別の因子構造を分かりやすくするために、配列し直したものである。表中の*印は因子負荷量の高い尺度を示している。

表11の第I因子、第II因子を構成している尺度を通覧すると、A型者とB型者の第I因子は因子を構成している尺度が全く同じであることが分かる。また、O型者の第I因子もAg尺度が含まれないことを除くとA型者、B型者の因子構造と同一である。一方、AB型者の場合はT尺度

表11 血液型による第I因子, 第II因子の分布

因子 血液型 尺度	第I因子				第II因子			
	A型者	B型者	O型者	AB型者	A型者	B型者	O型者	AB型者
D 抑うつ性	*	*	*	*				
C 回帰性	*	*	*	*				
I 劣等感	*	*	*	*	(*)		(*)	
N 神経質	*	*	*	*				
O 主観性	*	*	*	*				
Co 非協調性	*	*	*	*				
Ag 攻撃性	*	*			*		*	*
G 活動性					*	*	*	*
R 衝動性					*	*	*	*
T 思考的外向	(*)	(*)	(*)					
A 支配性					*	*	*	*
S 社会的外向					*	*	*	*

(*)は逆転尺度

(逆転尺度)とAg尺度が第I因子に含まれていないが、第II因子についてはA型者とO型者が第II因子を構成している尺度が全く同一である。血液型との関係以上に、Y-G性格検査は12尺度をほぼ二分する形で因子が構成されている。即ち、ABO式の血液型別にY-G性格検査からの性格構造を分析すると、大きく解釈して『内向性・内閉性—外向性・顕示性』という2軸があるものと思われる。これらの結果が血液型による性格構造の方向性なのかはよく分からない。おそらく、Y-G性格検査は従来の構成尺度である6因子ではなく、2因子という可能性を含むものといえるかもしれない。因子分析を行った結果においても、血液型間で類似性が見られることから、血液型を弁別しているとはいえないと思われる。

IV. 結 語

本研究から得られた結果は、ABO式血液型が心理学的に標準化された性格検査のさまざまな測度を特徴づけるとは言えなかった。長谷川(1985年)も『「血液型と性格」についての非科学的俗説を否定する』という論文の中で、「血液型は、各人の行動特性を予測する上でほとんど役に立たないということがわかった。それを信じる人々が多いのは、①記述があいまいで、反証のAmiにかかりにくいこと、②誰にでもあてはまるような記述を、表現を変えて各血液型にちりばめていること、③都合のよいケースばかりを集め、まことしやかな事後解釈をしていること、などのためであろう」と述べている。大村(1993年)も『「血液型気質相関説」と「血液型人間学」の心理学的研究II』という論文の中で、「これらの結果を追試者が同じ手法で問題に迫ってもこれ

と同じ結果が得られるとは限らないであろう。血液型と気質・性格との関連性に関するネガティブな材料を収集しても、このような研究によって血液型性格診断とか、血液型占いなどというのが滅亡するであろうか。わたくしは決してそうはならないと思う。このような研究によってかえって勢いづけられ、日本の大衆文化にどんどん浸透していつてしまうのではないだろうか。反論が逆効果になっているのである」と述べ、現代社会の風潮を嘆いている。

筆者ら（1994年）は、『いわゆる血液型性格についての児童・青年の自己評価からの一考察』という論文の結語で「仮に、血液型と気質（性格）との間に関連性があるのであれば、大学生に実施した異なる2種類の調査間においても高い一貫性が見られるはずである。しかし、共通した関連性を見出せないのではないだろうか。古川が情熱をかけて研究した血液型と気質との相関説は、本研究による分析で、その関連性に乏しいと結論づけてよいのではないかと思われる」と述べ、ここでも否定的な見解を主張している。

「血液型と性格」という分野は、大学・短大の「心理学」の講義においても学生が興味を持ちやすく、理解しやすいテーマである。また、学生の日常生活においても話題性が豊かであると同時に、歪んだ知識を他者に表現したくなるテーマである。しかし、この関係が科学的に検証されているのではなく、大村が「FBI効果」と呼んだ、①フリーサイズ効果（Freesize effect）、②ラベリング効果（LaBeling effect）、③インプリンティング効果（Imprinting effect）による影響がそのように思わせているに違いない。「信じる」「信じない」は別にして、学生たちが知っている以上に、両者の関係は希薄と言わざるを得ない。本研究の結果から、“少なくとも性格検査を特徴づけている構造には、血液型による差異が見つからない”という事実が明らかになったものと思われる。

<引用文献>

- 藤田主一・井口拓自・佐藤達哉・大村政男・富家 孝：血液型性格判断，ホントか，ウソか．日本応用心理学会第61回大会発表論文集，1994，17．
- 藤田主一・岡村一成・外島 裕：いわゆる血液型性格についての児童・青年の自己評価からの一考察．応用心理学研究，1994，19，45-59．
- 古川竹二：血液型による気質の研究．心理学研究，1927，2，612-634．
- 古川竹二：血液型と気質．三省堂，1932．
- 原 来復・小林 栄：血液ノ類属的構造ニ就テ．医事新聞，1916，No954，937-941．
- 長谷川芳典：「血液型と性格」についての非科学的俗説を否定する．日本教育心理学会第27回総会発表論文集，1985，422-423．
- 能見正比古：血液型でわかる相性．青春出版社，1971．
- 大村政男・花沢成一・佐藤 誠：新訂・心理検査の理論と実際．駿河台出版社，1985．

大村政男：血液型と性格。福村出版，1990.

大村政男：「血液型気質相関説」と「血液型人間学」の心理学的研究—古川竹二教授生誕百年を記念する—。日本大学人文科学研究所研究紀要，1991，42，71-92.

大村政男：「血液型気質相関説」と「血液型人間学」の心理学的研究II。日本大学人文科学研究所研究紀要，1993，46，115-155.

佐藤達哉・渡邊芳之：現代の血液型性格判断ブームとその心理学的研究。心理学評論，1992，35，2，234-268.

八木俊夫：YG 性格検査—YG テストの実務応用的診断法—。日本心理技術研究所，1987.